

学術奨励賞を受賞して

循環器内科副部長 白石 淳

昨年度の学術奨励賞をいただいた“Optical frequency domain imaging –guided rotational atherectomy followed by drug-coated balloon dilation in a patient with severe thrombocytopenia” (Cardiovasc Interv Ther 2018 ; 33 : 395-397) および“Stent-less percutaneous coronary intervention using rotational atherectomy and drug-coated balloon : a case series and a mini review” (Cardiovasc Revasc Med 2018 ; 19 : 705-711) は、いずれもロータブレーターおよび薬剤溶出性バルーン (DCB : drug-coated balloon) による、ステントを用いないカテーテル治療 (stent-less PCI) に関する報告です。現在 2 剤の抗血小板剤 (DAPT : dual antiplatelet therapy) 投与下の薬剤溶出性ステント (DES : drug-eluting stent) 留置を前提とした PCI が冠動脈疾患における血行再建の主流となっております。しかしながら実臨床においては DAPT の使用、DES の留置が不適切と考えられる症例が少なくありません。私は当院において、再生不良性貧血や骨髓異形成症候群に伴う高度の血小板減少、出血性胃癌、長区域にわたる高度石灰化病変、右冠動脈入口部病変、および川崎病冠動脈後遺症等の臨床背景、病変背景を有する症例に対して stent-less PCI を行い良好な経過を得た症例を経験しており、上記の報告の中でその一部を提示しております。今後も個々の症例においてメリットとリスクのバランスを十分に考慮し、stent-less PCI 施行症例を積み重ねていく所存です。

学術奨励賞を受賞して

消化器内科 医長 山田 真也

この度は、2018 年度学術奨励賞をいただき誠にありがとうございます。

2018 年度は ‘Helicobacter pylori eradication therapy ameliorates latent digestive symptoms in chronic atrophic gastritis’ (Digestion 2018 ; 97 : 333-339) と ‘Different risk factors between early and late cancer recurrences in patients without additional surgery after noncurative endoscopic submucosal dissection for early gastric cancer’ (Gastrointestinal Endoscopy 2019 ; 89 : 950-960) の 2 本の論文を publish することができ、関係各位には厚く御礼申し上げます。その中で今回は後者の論文の概要についてご報告いたします。近年、本邦を中心に消化管の早期悪性腫瘍に対する内視鏡治療 (ESD) が急速に広まってきております。特に胃癌領域においてその普及はめざましく、論点は技術的問題から、長期予後やさらなる適応の拡大に移りつつあります。当院は ESD 黎明期から関西地区の内視鏡治療のトップランナーの一員として症例数を重ねてまいりました。その結果、今回、早期胃癌 ESD で非治癒切除と診断された症例の長期予後についての多施設共同研究 (EAST study) に参加させていただくことができました。EAST study では、胃癌 ESD 非治癒切除症例の転移リスクのスコアリングシステムを構築することができ、その結果は 2018 年改訂の第版胃癌診療ガイドラインに記載されるまでに至りました。このスコアリングシステムは、実臨床の現場でわれわれが判断に迷う ESD 後非治癒切除症例の取り扱いについて、大きな道標となったことは確かです。本論文はそのサブ解析についての報告で、胃癌 ESD 非治癒切除後経過観察例において治療後早期で再発する症例と晩期で再発する症例について、各々でその臨床病理学的特徴を明らかにすることができました。超高齢化が進む本邦において、胃癌はとくに高齢者が罹患することの多い疾患といわれています。我々臨床医は、高齢者にとっての最適な医療を模索する中で、QOL の維持と根治性の

ざまに思いが揺れ動くことをしばしば経験します。そんな中、ESD 後早期再発リスクを明らかにした臨床的意義は大きく、本研究の成果は今後の早期胃癌診療の一助になるものと考えます。そのようなエビデンスを当院より発信できたことを誇りに感じるとともに、本研究への参加、論文執筆に快く賛同し、後押しして下さった当科吉田憲正先生、戸祭直也先生と論文作成に関して多大なるアドバイスをいただいた藤井秀樹先生にはこの場を借りてあらためて御礼申し上げます。

2018 年京都第一赤十字病院学術奨励賞受賞者寄稿

学術奨励賞を受賞して

血液内科専攻医 長田 浩明

この度は平成 30 年度の学術奨励賞をいただき、誠に光栄に存じます。今回賞を頂いた「ウサギ ATG 投与で発症した EB ウイルス関連血球貧食性リンパ組織球症に rituximab が奏功した再生不良性貧血」は、和文ではありますが「臨床血液、2018 年 59 巻 4 号」において報告させて頂きました。

再生不良性貧血は、末梢血での全ての血球の減少と骨髄の細胞密度の低下を特徴とする症候群であり、重症度によって治療方針が定まっています。本症例は高齢の重症再生不良性貧血の患者であり、シクロスポリン単剤加療が無効で頻回の輸血を要していました。高齢でしたが、Performance status が良好であったため、ウサギ抗ヒト胸腺細胞グロブリン (ATG) の投与を行ったところ、投与後 31 日目に発熱と全身倦怠感、肝・腎機能障害を認め、突然ショック状態に至りました。異型リンパ球の出現はなく、肝脾腫、リンパ節腫脹も認めませんでした。しかし、モニタリングしていた血中 EBV コピー数が上昇し、フェリチンも高値であったため骨髄穿刺を行い、血球貧食像を認めました。以上より、EBV 関連血球貧食症候群 (EBV-HLH) の形態で発症した EBV 関連リンパ増殖性疾患 (EBV-LPD) と診断しました。EBV-LPD は、T 細胞の機能低下によって EBV 感染 B 細胞の増殖を制御できずに発症すると考えられています。そのため、感染 B 細胞を直接攻撃する抗 CD20 モノクローナル抗体の rituximab を投与したところ速やかに全身状態は改善しました。その後再生不良性貧血は寛解を維持して輸血は不要となり、EBV-LPD の再燃もなく経過しています。稀な EBV-HLH の形態をとる EBV-LPD に対しても rituximab は有効であり、EBV コピー数のモニタリングが診断に有用であることが示唆されました。

容態の変化を観察し、その原因となる病態を念頭に置きながら治療することで、早期に適切な治療を行い救命できた症例であり、今後の診療における教訓となりました。今後も質の高い医療を提供できるような日々の診療に精進して参ります。

2018 年度京都第一赤十字病院学術奨励賞受賞者寄稿

学術奨励賞を受賞して

放射線治療科部治療品質管理係長 田中 義浩

この度は平成 30 年度学術奨励賞をいただき、身にあまる光栄と深く感謝いたします。賞をいただいた “Do the representative beam data for TrueBeam™ linear accelerators represent average data?” (J Appl Clin Med Phys. 2019 ; 20 (2): 51-62) は、本邦において臨床使用されている Varian 社製リニアック TrueBeam のビームデータ多施設解析に関する報告で、Journal of Applied Clinical Medical Physics に掲

載されました。

本報告では、本邦で臨床使用されている 17 施設 21 台分の Truebeam のビームデータのばらつきを調査しました。その結果、percent depth dose のばらつきは 1.0% 未満と非常に小さく、同様に、off-center-ratio (OCR) のばらつきも平坦領域で 1.0% 未満、辺縁領域で 0.5 mm 未満であることが判明しました。Output factor のばらつきも 1.0% 未満であり、また、representative beam data (RBD) と我々が算出した平均データも非常によく一致する結果となりました。ただし、照射野サイズが $30 \times 30 \text{ mm}^2$ では OCR で 2.0% 以上のばらつきが確認されました。以上より、小照射野測定を除き TrueBeam のビームデータはばらつきが非常に小さく、我々の報告は RBD の有用性を立証する 1 つの因子となりました。

最後になりますが、学術奨励賞をご評価くださった池田院長、ならびに本研究にご協力いただきました皆様に心より深謝いたします。